

〈翻訳〉

アン・フィラー・スコット

19世紀アメリカの女性組合

——福利活動から改革運動へ—— (2002)

〈本文と訳者解説〉

河野 眞 (訳・解説)

目次

- 0 はじめに
- 1 第一段階 (1790頃-1820) : 福利活動
- 2 第二段階 (1820頃-1860) : 世界の新たな形成
- 3 第三段階 (1861頃-1865) : 南北戦争
- 4 第四段階 (1865-1910) : 大きな拡がり (第四段階の小区分は訳者による)
 - 宗教的団体
 - 世俗的団体
 - シカゴ万国博覧会と女性ソサエティ
 - 活動の多彩な広がり
 - 高等教育への女性の進出
 - 女性参政権の達成

5 評価

[訳者解説]

——訳注 (*を付す) は次号以降を予定——

0 はじめに

*アレクシ・ド・トクヴィル以来、多くの社会学者は、自由な参加に基づくアソシエーション(クラブ・ソサエティ)がアメリカ合衆国の最初期からの機構的特徴との見解を表明してきた。しかし実際には、女性史研究がそれらに取り組むまでは、([訳注] 男女の別を問わず)アソシエーションの歴史自体への関心が極端に低く、研究も稀であった⁽¹⁾。1944年、*アーサー・

(1) ソサエティとの幅広い取り組みを欠いては女性史研究を進めることはできない。その意味では、女性史がこの分野において意義大きい研究を生み出したのは不思議ではない。しかし奇異なことに、男性歴史家がほぼ一世紀にわたって、男性にとって意義のあるソサエティという対象をないがしろにしていたのは何ゆえであったろうか。僅かな男性ソサエティの研究の中から、いわゆる《慈善事業の国》を論じた次の2書を挙げる。Clifford S. GRIFFIN, *The Brother's Keepers: Moral Stewardship in the United States 1800-1805*. New Brunswick 1960.; C. I.

シュレジンジャー（シニア）は、同僚の歴史家たちの目をこのテーマに向けさせ、それにあたって、今なおそれ以上は考えられないようなまとめ方をした⁽²⁾。

集団行動のトレンドは、それがアメリカの歴史に入った初期にはまことに緩慢であった。しかし時と共に新しいチャンスが供され、そこで得られる利点が認識されると、たちまち飛躍に転じた。一般論として言えば、アソシエーションの成立は、デモクラシーに則った自恃の高まりと社会経済生活の発展（むしろそこで増大する複雑性も併せて）に対してパラレルな関係にある。かかる原理の下での新たなどんな転回もアソシエーションの拡大に道を拓き、同時により大きな企劃にもとめられる経験を獲得させたからである。人間の生き方においてその影響を蒙らない領域はどこにもなかったと言ってよいくらいである。

かくしてシュレジンジャーは進路を示したが、誰もそれに従わなかった。今日でこそ自由意志の活動は大きな注目をあつめているが、にも拘わらず今日までアメリカの歴史にとってアソシエーションが果たした役割への包括的な歴史的分析はなお手掛けられていない。たしかに、女性組合に関する研究は大量になされておられ、特定の組合や個別のソサエティについて書かれている。しかしそれらの諸研究を関聯付け、それぞれの意味合いを大きな脈絡において解することができるような一般的な概念規定は欠けている。本稿は、そうした関聯への試みである。

女性組合の理論的考察をすすめる上で、三つの設問を手立てにしようと思う（一聯の二次的設問はこの三つに属することになる）。(I)これらのオーガニゼーションがもっていた課題とは何だったか。過去2世紀を通じて、

FOSTER, *An Errand of Mercy: The Evangelica United Front 1790-1870*. Chapel Hill 1960.; 次のドイルの研究は卓越した手法で男性ソサエティと新たな地域体を把握しているが、女性団体に注目してはいない。参照, Don Harrison DOYLE, *The Social Order of a Frontier Community: Jacksonville, II., 1825-1870*. Champaign 1978.; またハンドリン夫妻の研究も自由意志による参加について一般論を述べるにとどまっている。参照, Oscar and Mary HANDLIN, *The Dimensions of Liberty*. Cambridge 1961.

(2) Arthur SCHLESINGER sen., *Biography of a Nation of Joiners*. In: *American Historical Review*, 50 (1944-45), pp. 1-25.

文字通り何千というこの種の団体が設立された事実に照らせば、これらの団体がアメリカ社会において無くてはならない課題を受けもっていたことは明らかであろうが、そこでの課題とは何だったか。(2)女性組合のなかでなされた活動は、どんな社会的・政治的・経済的影響をもたらしたか。(3)アソシエーション活動は、アメリカの女性に、また女性が関与する局面の社会的定義にどのような影響を及ぼしたか。

1 第一段階 (1790頃-1820)：慈善活動

設問を解くためには、アメリカ独立革命(1776年)以来の推移のなかで女性ソサエティがたどった歴史を略述する必要がある。1790年代には、女性に選挙権はなく、公的な役職に就くこともできなかった。のみならず、大半の公的施設は、女性の協力をも拒んでいた。非常に多くの教会でも、教会堂への参集者の多数は女性であったにも拘わらず、女性にはどんな指導的な立場も認められなかった。しかし女性たちは、誰も異存を差しささみよのない人間的な喫緊事があることを知っていた。女性たちは、先ずそこに切り込んだ。その際、女性たちは、男性が活動のために、とりわけ公的目的のための組織としてアソシエーションを実現させていたことに倣った。ヒューマニズムの運動が活発化する上で不可分の道徳的責任に幾らか変化させたのが女性たちの工夫であった⁽³⁾。

こうしたオーガニゼーションの最初の団体として*イザベラ・グラハムによる「子供をもつ貧困寡婦を支援するソサエティ」がニューヨークで発足したのは1797年であった⁽⁴⁾。以下では「寡婦ソサエティ」と略称するが、あだかもニューヨークが急速な発展を遂げたのに伴って貧富の差が拡大し、寡婦となる女性が増えた時期であった。設立者のグラハムは大胆で機

(3) 18世紀のソサエティに関する手元にある最も優れた研究成果として次を参照, Frank Warren CROW, *The Age of Promise: Societies for Social and Economic Improvement in the United States 1783-1815*. Diss. University of Wisconsin 1952.; 最近発表されたリチャード・ブラウンの2篇の論考はマサチューセッツ州だけを対象にしている点で限定的であるが、問題の解明に寄与する。Richard D. BROWN, *The Emergence of Voluntary Associations in Massachusetts, 1760-1830*. In: *Journal of Voluntary Action Research*, 2 (1973), pp. 64-73.; DERS., *The Emergence of Urban Society in Rural Massachusetts 1760-1820*. In: *Journal of American History*, 61 (1974), pp. 29-51.

(4) Joanna BETHUNE (Ed.), *The Power of Faith Exemplified in the Life and Writings of the Late Mrs. Isabella Graham of New York*. New York 1816.

転が利き、かつ信仰心の厚い指導者であった。彼女自身が寡婦であり、また自分の力で苦境を打開しており、慈善活動によって時間をかけずに問題を解決できる見通しを立てていた。友人の女性たちとその活動に着手するや、ただちに判明したのは、女性にはニューヨークで生計を立てるチャンスがほとんど無く、まして幼い子供を抱えている場合はなおさらという現実であった。そのため「寡婦ソサエティ」は、自助のオーガニゼーションに向けてさまざまな試みを行なった。特に意をもちいたのは、寡婦が働いて生活の糧を売るための学校を設けることであった。寡婦たちの子供に宿泊所を供し教育を受けさせたのである。貧困という悪魔の罠を打破するこうした努力の成果は、都市の公共学校のシステムづくりにあたって各地で見本となった。事実その活動は、教育に関心を向けさせることにおいて、19世紀を通じて女性組合の型の呈示となった。「寡婦ソサエティ」は、設立の最初の冬に98人の寡婦と寡婦たちが抱える200人以上の子供たちを救った。以後、その数は年を追って増えていった。

「寡婦ソサエティ」に倣った団体は、ほどなくボストンとフィラデルフィア、さらに他の東海岸の諸都市で設立された。1800年を過ぎた頃にはどの都市にも、またどの村にも慈善とミッションのソサエティができていた。それらは(1セント刻みの募金)による《セント》ソサエティでもあった。これは女性組合の初期の特徴であると共に、以後の発展のどの段階にも組み込まれた要素であった。その点では通時的な面はあるものの、これをカテゴリーとして押さえるのは、社会の一層の発展と共に起きた女性組合の変化を区分するのに役立つだろう。

とまれ1793年から1820年までが第一段階である。この時期については、やや単純化して言えば、慈善のためのアソシエーションが女性組合の主たるタイプであった⁽⁵⁾。それは教会の教区と重なっていることもあれば、宗派を横断していることもあった。しかしどちらの場合にも、その目的は宗

(5) 《慈善ソサエティ》(benevolent society)の概念は、キリスト教に即した関心を教会の外でも目覚めさせるために設立されたナショナルかつ非教會的なソサエティを指していた。最も重要なものには次の諸団体がある。「アメリカン・ボード(海外ミッション会衆)」(American Board of Commissioners for Foreign Missionaries, 1810)、「アメリカ聖書協会」(American Bible Society, 1816)、「アメリカ・ホーム・ミッション・ソサエティ」(American Home Mission Society, 1826)

教的な意味付けをもって表明された。そして、何らかの原因で自力では生計を立てることができない人々、とりわけ女性と子供に焦点を合わせていた。慈善にいそむ女性たちによる救援の試みは、身体的なケアと共に心のケアにも向けられた。彼女たちは、自分たちが保護する人々の物質面だけでなく、霊的な救済をも視野に入れた。したがって、慈善活動の女性たちが貧しい女性たちに臨むにあたっての《元型》は、片手に衣食を、片手に聖書を、であった。

これらのソサエティの組織は申し分なかった。どの団体も定款をもち、女性たちがあつめた金銭や物品をただしく管理する厳格な規則をつくっていた。男性にもとめられたのは、禱りの場の提供と金集めであった。そして重要な活動である貧民家庭の訪問と必要なものの手当ては女性たちがおこなった。さらに女性たちは、貧困とその原因を考えるという問題も見過ごさなかった。

当初、女性たちは、《品性のよい》貧困者を選び出すことに努めた。また貧困の原因を悪徳とりわけ飲酒癖に帰せしめる傾向もあった。しかし抽象的な《貧困者》から個々人の運命へと視点が移るに連れて、悪徳は、生来の欠陥ではなく、むしろ無知に起因すると考えるようになった。そこから、学校の設立と運営が、女性による慈善活動団体の主たる課題となった。たとえば*「ローリー・ノースカロライナ女性慈善ソサエティ」が示した信念によれば、彼女たちが支援した子供たちは《自らの才能と信仰によって世界を照らす者になる》チャンスがあるのだった⁽⁶⁾。教育は社会的不遇の治療する手立てという考え方には長い歴史があり、慈善組合はそれをアメリカ文化に定着させることに貢献した。

2 第二段階 (1820頃-1860) : 世界の新たな形成

アメリカ社会は常に変化のなかにあった。しかし、基本構造の転換において際立つ特定の時期がある。1820年代と30年代は、交通システムから宗教の分野に至る何もかもが転換した時期であり、それゆえ女性によるオーガニゼーションもそのあり方と課題に変化をきたしたのは不思議では

(6) *Revised constitution and by-laws of the Raleigh Female Benevolent Society with Reports of the Society From Its Commencement.* Raleigh, N. C. 1823.

ない。慈善組合の数は増えてゆき、それらが、ほとんど自治体にも最低限のセイフティ・ストラクチャーを整えていた。女性たちのなかには、組織的活動によって慈善を単純に果たすことだけを目的とせず、その延長線上で社会的改革を目指す者もあらわれた。節制運動（特にアルコールを適度に抑える運動）と、倫理面での改革運動、それに奴隷制度反対運動は、女性たちが参加した三つの大きな運動であった。少数の女性改革者たちは、慈善組合のためにソーシャルワークの専門家として活動をはじめた。しかし慈善に挺身する大多数の女性は、伝統的なソサエティ活動のルールを走るだけだった。

南北戦争前のニューヨーク州ロチェスターの女性組合に関する*ナンシー・ヒューイットの研究が明らかにしたように、ある種のソサエティのメンバーは、社会と文化の現状に関与した。奴隷制に反対するソサエティに属した女性たちは、社会的ヒエラルヒーのほぼ最下層に食い込んだ。その種の団体に加入した女性たちには*クェーカー信徒が少なくなかった。彼女たちはその宗教もからんで、地域の社会的位階秩序の外に立たされていた面があった。しかしスペクトルの反対側の端に注目すると、そこには、慈善組合、あるいは教会教区と結びつきをもつ裁縫サークルのメンバーを馬鹿にするような者はほとんどいなかった。そうしたソサエティのメンバーは、通常、政治や経済を率いる上層を出身とする女性たちで、命懸けで活動しているわけではなかった⁽⁷⁾。もっとも、ロチェスターの事例を一般化しようとするれば、これは怪しくなるかもしれない。それを示すのは*エイミー・スワードローの調査研究で、それによれば、ニューヨークの奴隷制反対を掲げた二つのソサエティの場合、牽引したのは有力な商人の妻たちであった⁽⁸⁾。また世代交代の効果について興味深い推測も可能である。すなわち*《共和制の母たち》の娘が大人になり、そのなかの多くが、共和国の夢を（栄華と都市化のあおりで迫りつつあった）没落から救い出

(7) Nancy A. HEWITT, *Women's Activism and Social Change*. Rochester, New York 1822-1872, Ithaca 1984.

(8) Amy SWERDLOW, *Abolition's Conservative Sisters: The Ladies' New York Anti-Slavery Societies, 1834-1840*. (1976年の「女性史に関するパークシャー大会」における口頭発表)。スワードローの講演のタイトルに保守的心情が盛りこまれているように、女性権利をめぐるこれらの女性たちの観点には奴隷制と戦う志向はみとめられない。

すことを喫緊の愛国心と受けとめたのである⁽⁹⁾。

新たな種類の女性参加の最初のアクセントとして擡頭したのは、ニューヨーク市における*「ニューヨーク女性道德改革協会」であった。それに続いて、ニューイングランドの全域とその西に広がる地域に、類似のソサエティが設立された⁽¹⁰⁾。倫理改革運動の女性たちが登場して、娼婦の矯正と決まった一つの倫理規準の浸透を図った。が、最終的には、その女性運動家たちも、人間の本性、さらに政治について多くのことがらを習得した。

同じ頃、節制を促す運動のために、女性たちが立ち上がった。この節制運動は、従来、上層に属している男性たちの仕事であった。当初、女性たちは、既存のソサエティに参加する形をとっていた。しかし1830年代には、純粋に女性だけの節制ソサエティが産声を挙げた。その運動は多彩な展開を遂げ、やがて*1840年代の禁酒の法制化を支えるようになったが、並行して純然たる女性組合も同じ速度で発展した⁽¹¹⁾。

しかし、女性たちの行動のスタイルがどれほど変化したか、また女性たちが、女性につきものと思われていた伝統的な行動基準を疑問視するまでになっていたことを何よりも示すのは、奴隷制への反対運動であろう。ここにおいて女性たちは、奴隷制に反対するナショナルな地平に立つことを男性と分かち合っただけではない。彼女たちは、独自のソサエティをも設立した。1836年の時点では、奴隷制に反対するソサエティは500団体を超えたが、そのうち10%は女性によるソサエティであった。その一年後には、その種のソサエティ1,006団体のうち、77団体が女性組合であった。奴隷

(9) 《共和制の母たち》のイデオロギーの詳しい検討は次を参照, Linda K. EERBER, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in the Revolutionary America*. Chapel Hill 1980. 基本的理念の意味では、これらの女性たちは息子たちを共和制主義者になるように教育するのが当然であったが、娘たちもまた母親からそれを学んだ。

(10) Carol SMITH-ROSENBERG, *Religion and the Rise of the American City: The New York City Mission Movement 1812-1870*. Ithaca [Cornel University Press] 1971.; Barbara J. BERG, *The Remembered Gate: Origin of American Feminism: The Women and the City 1800-1860*. New York 1978. スミス＝ローゼンバーグとバーグの二著を併せて読むと、慣習改革運動の往時の様相をよく知ることができる。また次を参照, Mary P. RYAN, *Bradle of the Middle Class: The Family in Oneida County New York 1790-1865*. New York 1981. 本書はニューヨーク州ユーティカ (Utica) における慣習改革運動に関する考察で、他方、上記ヒューイットの研究は(前掲注7)はロチェスターにおける慣習改革運動を取り上げている。

(11) Jed DANNENBAUM, *The Origins of Temperance Activism and Militancy Among Women*. In: *Journal of Social History*, 15, pp. 235-247.

制に反対する女性組合の精神的な推進力については、ボストンのソサエティに関する年報の1836年号から明瞭に知ることができる⁽¹²⁾。

彼女らは、自分たちを勇気づけてくれる《理論的な原則》を十二分に見出した。その原則に即した彼女たちの実際行動は強い抵抗にぶつかった。

それに先立つ1820年にもすでに、男性が中心となった反奴隷制ソサエティが女性の参加を認めていた。しかし、女性の存在を視野に入れるだけで、耳を貸すものではないとの暗黙の前提があった。集会において女性が発言を試みるや、激しい反発に見舞われた。が、それが逆に、高まりつつある女性の権利運動を後押しした。周知のように、その運動は1848年にニューヨーク州*セネカフォールズでの会合をまとめた文書の形で確かなものとなった。それに続いて、多くの集会が開かれた。もし改革運動がしっかりした機構の形をとるまでになっていたら、次の歩みは恒常的なオーガニゼーションの設立であったろう。事実としても、1852年に*エリザベス・キャディ・スタントン、*ポリーナ・ライト・デイヴィス、*ルーシー・ストーンが署名した呼びかけにおいて、《基本的かつ活動力のある》オーガニゼーションの時期が来たとの文言が入った。しかしその集会そのものにおいて、数人の女性が感動的な演説をし、しかもその説いたのは、強固なオーガニゼーションは決して望んではない、というものだった。ルーシー・ストーンの記述を引用すると、彼女たちはそうした諸々のオーガニゼーションに揃って顔を出して、後退の姿勢を示した。かくして、集会は以後もローカルな次元で、州単位で、さらにナショナルな場でも開かれて南北戦争(1861-65)にまで至ったが、全体をまとめるソサエティは機構としては出現しなかった。女性の権利をもとめる闘士たちが一つにまとめるのは南北戦争の勃発後で、しかもそれまで培ってきたプロパガンダを戦争の後方支援にまとめるためであった。そうした行動を解明するのは難し

(12) ここに挙げた数字は、「アメリカ奴隷反対協会ニューヨーク」(American Anti-Slavery Society New York)の第3,4年報(1836, 1837)による。また引用文の出典は、「ボストン奴隷制反対女性協会」(Boston Female Anti-Slavery Society, Right and Wrong in Boston)の年報(Annual Report, 1836)。

い。もとより、エネルギーな女性たちが、数多くの委員会を通じて《我慢の限界》に追いやられていたことは当然考えられる⁽¹³⁾。

3 第三段階 (1861頃-1865) : 南北戦争

南北戦争は、女性組合の活動を次の段階へ導いた。この段階で、女性たちは、過ぐる1850年代に慈善団体や改革をめざすオーガニゼーションにおいて学びとった全てを応用した。チャールストン港に轟いた艦砲音が消えやらぬ中（〔訳注〕1863年4月7日、奴隷輸入港でもあった拠点の南軍陣地を北軍艦隊が砲撃したことによって戦争が始まった）、女性たちはあらゆる場所で、兵士を救護するソサエティを組織しはじめ、団体は文字通り数千を数えたと言われる。女性たちの働きぶりは、どの面においても、何をどうすべきかを知っていることを示すに十分だった。これら多数の団体は、頂上組織の*「合衆国救援委員会」の下にまとめられた。指導したのは、クリミア戦争（1853年10月-1856年3月）中のイギリス人の経験とフローレンス・ナイチンゲール（1820-1910）の活動に強く影響された男性グループであった。そこでの課題は兵士たちの健康と救護のケアで、それは見事に遂行された⁽¹⁴⁾。

その成功には、女性組合が物資を集め、仕分けし、保管にあたったことが少なからず与っていた。元は地元の男性指導者たちの手にあった地域の救援委員会の仕事を、女性たちは多くの場所で次々に担当するようになった。たとえばボストンでは、地域の代表者に指名されていた男性たちが、《その仕事をかなり早い時期に*「ニューイングランド女性補助協会」に移譲し、協会は戦争全体を通じて女性たちの力とエネルギーで際立ったものとなった》。ニューヨークでは、*「軍隊支援のための女性セントラル・アソシエーション」が、地域の全域にわたって救助ソサエティの活動を担当した。ペンシルヴァニア州、デラウェア州、さらにニュージャージー州の西

(13) Mary Jo / Paul BUHLE, *The Concise History of Woman Suffrage*. Urbana 1976, p. 196.

(14) 「合衆国救護委員会」の目的と活動に関するオフィシャルな報告は次を参照, Charles J. STILLE, *History of the United States Sanitary Commission*. Philadelphia 1866. また比較的新しい論説として次を参照, William Quentin MAXWELL, *Lincoln's Fifth Wheel*. New York 1957. なお指導者たちの意図に関するアイロニカルで興味を惹く解釈が次の文献に見える。George FREDERICKSON, *The Inner Civil War*. New York 1965. しかしこれらの歴史家たちの誰も、兵士救護組合が果たした重要な役割を見逃している。

部のほぼ全域において、物資収集の責任は男性たちの同意の下《婦人たちに委ねられ、それを受けて彼女らは「女性ペンシルヴァニア支部」を名乗った》⁽¹⁵⁾。シカゴでは、二人の女性、*メアリー・リヴァモアと*ジェーン・ホーゲが「ノースウェスト救援委員会」を率いて多大の成果を取めた⁽¹⁶⁾。

南部の女性たちもまた、戦争の勃発にただちに反応した。1862年1月には、アラバマ州だけでも、100を超える団体のメンバーが、軍服の糸紡ぎ・織布・縫製・編み上げとその他の物資集めにいそしんだ⁽¹⁷⁾。南部連合国のほとんどの州において、女性たちは、ホスピタルを組織すると共にその人員を確保し、砲艦のための募金をおこない、街道に沿って傷病兵のための宿泊施設を設け、さらに寡婦・孤児・兵士の家族のケアにあたった⁽¹⁸⁾。北部でも南部でも、女性たちの経営能力や運営にあたっての鋭い感覚には男性の観察者から驚きの声が多く聞かれるようになった。そこから明らかになることだが、南北戦争より何十年も前から女性組合では現実となっていたものに、男性はほとんど気付いていなかったのである。

4 第四段階 (1865-1910) : 大きな拡がり

南北戦争が終わった時、多くのアメリカ人は失望した。たしかに大きな

(15) C. J. STILLE, *History of the United States Sanitary Commission* (前掲注14), pp. 180-184.

(16) 「ノースウェスト救援委員会」(Northwestern Sanitary Commission) を集中的に扱った歴史記述では、全国規模で男性が主導していたことが中心となっており、全国的にも地方においても女性の指導的な役割を果たしたことは無視されていた。これを是正したものとして、最近の博士論文を参照, Lori GINZBURG, *Women and the Work of Benevolence: Morality and Politics in the Northwestern United States 1820-1905*. Diss. Yale University 1985.; また「アメリカ史家協会」(Organization of American Historians) において1986年4月に行なわれた次の講演を参照, Jeanie ATTIE, *Forging a Liberal Political Culture: the USSC, Northwestern Women and the Care of the Union Army* (April 1986).

(17) 「アラバマにおける女性による救援活動のリスト, 1862年1月1日」(“List of Ladies’ Aid in Alabama Jan. 1. 1862”, Executive Papers, Alabama Department of Archives and History)、この資料を用いた次の文献による。H. E. STERKX, *Partners in Rebellion: Alabama Women in the Civil War*. New Brunswick 1970, p. 94.

(18) これについてはキム・フェイス (Kim FAYSSOUX) の調査研究に感謝する。彼女は、デューク大学ウィリアム・R・パーキンズ図書館に保存されている17点の収集資料に基づいて、南北戦争における女性の活動に関する研究を行なった。フェイスは、(注17)に挙げたスタークと同じく、従来一般に考えられて以上に、南部における女性たちによる慈善活動組合が従来一般に考えられていたより多かったことを明らかにした。兵士たちへの救難組合へとただちに切り替えた慈善活動組合はかなり多かったのである。

仕事を一緒に成し遂げるのには、たといそれが痛みや苦しみ、死や破壊をもたらすとしても、明らかにモラル的な高揚がある。しかし今、北部でも南部でも、女性たちの中には、戦時中がどれほどの激務であったかは別にして、自分たちが重要な存在だったとの感覚が失われたと感じた者もいた。戦時中に味わった何かを作りあげる可能性が消え失せた。この感覚を理解するには、戦争がもたらした社会と経済の大変化を考えてみなくてはならない。たとえば、急激な都市と国を挙げての工業の発展、それに賃労働の女性たちの増大と流入である。そしてこれが、ソサエティ活動を新たな段階へと促した。この段階に特徴的だったのは、女性組合の急速な広まりと分岐である。ソサエティは大きくなり、社会全体は《秩序を模索していた》、とは*ロバート・ウィーブのまとめ方である⁽¹⁹⁾。

宗教的団体

1865年を境に、女性組合は二方向に分岐独立した。とは言え、横のつながりがなかったわけではない。1865年以前には、女性によるほとんどすべての集団的な企劃には宗教的な土台があった。戦争中ですら、兵士のための救護ソサエティは、会合にあたっては先ず禱りを捧げた。したがって、形を変えた慈善ソサエティに他ならなかった。もとより、世俗的な目的を掲げる女性組合もまったく知られていなかったわけではなく、たとえばボストンの*「婦人生理学ソサエティ」あるいは黒人女性の間の相互扶助のソサエティができていた。が、その種類は極く少数で、ローカルな範囲にとどまっていた。

19世紀の最後の三分の一世紀には宗教的なオーガニゼーションが驚異的な速度で成長した。とりわけ三つのグループが規模においても影響力においても大きかった。それらは、非常に多くの女性たちに活力をあたえた。先ず、プロテスタント教会系の国内および国外ミッションのグループ、次が*「キリスト教婦人矯風会」(WCTU)、そして*「キリスト教女子青年会」(YWCA)である⁽²⁰⁾。しかし、何百万人の女性がこれら三種類のオーガニゼー

(19) Robert WIEBE, *The Search for Order*. New York 1967.

(20) 「キリスト教婦人矯風会」(WCTU)に関する近年の最も優れた研究として次の諸文献を参照, Ruth BORDIN, *Woman and Temperance: the Quest for Power and Liberty, 1873-1900*.

ションに組み込まれたかを明らかにするのは難しい。確かなのは、女性の多数が宗教的な問題でも政治問題でも保守的だったことである。それに対して、社会的正義を（個々人の救済と同じく）キリスト者の責任と見て、それを標榜する女性たちがいた。そうした見解は、後に*《社会的福音》と呼ばれることになった。総じて、女性が指導者の役割を最初に経験するのは宗教的なオーガニゼーションにおいてであった。むろん、世俗的なソサエティに入る者もいるにはいたが、リーダーとなった女性たちの多くは、先ずキリスト教会（特にプロテスタント教会）を枠組みとする活動にいそしんでいた。女性たちにとって宗教的なオーガニゼーション諸団体は、教育を高めることができる公的な場、さらに社会的諸問題への啓蒙の場であった。少数ではあれ、そこでおおやけの政治への手ほどきを受ける女性たちも見られた。かく、女性の世俗的権利をめぐる戦いにあたっては、先ずプロテスタント教会を枠として何らかの活動にいそしみ、そこからフェミニズムに開眼した女性が多かったのである。

世俗的団体

宗教的オーガニゼーションへの女性の参加が広がり、積極性が増すなかで、並行する新たな動きとして世俗的な女性ソサエティあるいは女性クラブが出現した。この世俗的な運動が起きたのは1860年代で、その時期には、イリノイ州クインシーにおける文藝クラブなど、多彩な目的のソサエティ諸団体が設立された。なお後者には、ニューヨークのソサエティ*「ソロシス」やボストンの*「ニューイングランド女性クラブ」がある。同時に、女性の権利をめざす男女の活動家たちは、全国規模のオーガニゼーション

Philadelphia 1981.; Barbara Lee EPSTEIN, *The Politics of Domesticity: Women, Evangelists and Temperance in Nineteenth Century America*. Middletown 1981.; Jack S. BLOCKER, *Give to the Winds Thy Fears; The Woman's Temperance Crusade 1873-1874*. Westport 1985.; Susan Dye LOEE, *Evangelical Domesticity: The Origin of the Woman's National Temperance Union Under Frances E. Willard*. Diss. Northwestern University 1980.; 合衆国と外国におけるミッション団体の活動に関する歴史研究は、その把握に向けた教会による歴史記述が今も増えている他、また次の文献を参照、R. Pierce BEAVER, *All Loves Excelling*. Grand Rapids 1968.; Rosemary KELLER and others (Ed.), *Women in New Worlds*. Nashville 1981.; 「キリスト教女子青年会」(YWCA)については、それに関する歴史研究者を得るのは今後の課題であるが、これまでのところでは優れた研究として次を参照、Mary S. SIMS, *The Natural History of an Institution: the YWCA*. New York 1936. このテーマに関する研究については、早晩、大きく開花することが期待される。

が必要であることで一致し、二つのオーガニゼーションを設立した。女性のみによる*「ナショナル婦人参政権協会 (NWSA)」(1869)と男性をも加入させる*「アメリカ婦人参政権協会 (AWSA)」である⁽²¹⁾。

以後2年のあいだに、どの都市にもどの村にも、文藝クラブや自助クラブ、女性のための図書館ソサエティ、女性教育のためのソサエティ、政治的平等をめざす協会、その他の数ダースのソサエティができていた。任意のサイズのどの都市にも、数えきれないほどの団体が存在するようになったと言ってよい。一例を挙げると、メイン州ポートランドだけでも、1890年には少なくとも女性ソサエティは50団体を数えた⁽²²⁾。

始めて調査されたことだが、驚くほどの発展を遂げたのは、相互扶助のソサエティのオーガニゼーション(聯合組織)や、医療に関わる支援プログラムの組合組織、それに南部の諸都市における黒人女性による種々のグループで、これは解放された貧しい奴隷の困窮を救うためのものであった⁽²³⁾。やや遅れて、ミドルクラスの黒人女性たちは、白人のクラブを見本にしつつ一聯のソサエティを設立した。彼女たちは、通常、白人のクラブから排除されていたのである。黒人女性たちは資力に乏しかったが、それにも拘わらず、これらのソサエティは黒人地域をかかえる自治体の発展には活力あるセンターとなった⁽²⁴⁾。

社会主義に傾く女性たちも結成に向かった。賃労働の女性たちは、女性

(21) 参照, Ellen C. DUBOIS, *Feminism and Suffrage: The Emergence of an Independent Woman's Movement in America 1848-1869*. Ithaca 1978. 本書は、これら諸々のアソシエーションの初期の歴史に関する最良の研究である。また筆者等による次の文献を参照, Anne F. SCOTT and Andrew M. SCOTT, *One Half of the People: the Fight for Women Suffrage*. Philadelphia 1975.

(22) 参照, Karen J. BLAIR, *The Clubwoman as Feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914*. New York 1985. 本書は、これまでのところ、クラブ運動の全体を扱った唯一の研究書で、また詳細な文献表が附せられている。

(23) 参照, Kathleen C. BERKLEY, *Colored Ladies Also Contributed: Black Woman's Activities from Benevolence to Social Welfare*. In: Walter J. FRASER, a. others (Ed.), *The Web of Southern Social Relations*. Athens 1985, pp. 181-203.; 他の種類のアソシエーションについては、たとえば次の諸文献を参照, Nancy Schrom DYE, *As Equals and As Sisters: Feminism, the Labor Movement and the Women's Trade Union League of New York*. Columbia 1980.; Allen DAVIS, *Spearheads of Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement*. New Brunswick 1985.; Abbie GRAHAM, Grace H. DODGE, *Merchant of Dreams*. New York 1926.

(24) Gerda LERNER, *Community Work of Black Club Women*. In: *The Majority Finds Its Past: Self Improvement and Sisterhood 1890-1915*. (マギスター論文) University of Wisconsin-Madison 1986.

だけの労働組合の設立をはじめ、それにはミドルクラスの女性たちが支援の姿勢を見せた。1880年代になると、合衆国北東部の女性オーガニゼーションの多数が、労働者階級の女性たちを《労働者少女》と呼んで困窮から救うために活動時間の一部を割くようになった。「キリスト教女子青年会」(YWCA)と「キリスト教婦人矯風会」(WCTU⇒p.165)、*「女性就業促進会」(WTUL)、それに*「女性教育産業組合」で、これらは階級の仕切りを克服することに真剣に取り組んだ⁽²⁵⁾。

シカゴの*「ハル・ハウス」⁽²⁶⁾やボストンの*「デニソン・ハウス」のようなソサエティのセンターでは、新たな設立されていた女子大学のいずれかにおいてアカデミックな学歴を終了していたミドルクラスの女性たちが移民女性との密接な交流の機会を提供した。特筆すべきことに、これらのソサエティ・センターは（やがて大学において形を得ることになる）新たな分野としての*社会科学の発祥地の一つでもあった。一口に言えば、合衆国全土は多彩な女性ソサエティに覆われた。

シカゴ万国博覧会と女性ソサエティ

1893年、コロンブスのアメリカ大陸発見から400年になるのを祝ってシカゴ万国博覧会が開催された。開幕にあたって、合衆国のどの州も見本市女性マネージャーによる委員会を設けて自己をアピールした。女性パヴァリオンは展示品でいっぱいになり、さながら全世界の女性代表者たちの大会の観を呈した。また並行して行われた200を超える文化・学術の大会のいずれにも女性たちは参加した。女性オーガニゼーションがアメリカ社会

(25) Carroll WRIGH (Ed.), *Bulletin of the Department of Labor*. No. 23, July 1899. ここには、女性組合諸団体に向けて送られたアンケートへの言及が含まれる。アンケートには千通以上の回答が得られ、それを基にすると、回答した組合の約四分の一は、メンバーの中に《女性労働者》を含むと答えていた。これらのメンバーの中には、女性労働者を支援するための支援組合をつくったところもある、そこでは夕べの集まりが催された。恐らく最も印象深いのはフィラデルフィアの「新世紀ギルド」(New Century Guild)で、千人に垂んとするメンバーを擁した。もっとも、《女性労働者》が官庁職員であったのか、教会堂の労働力であったのかは定かではない。なおアソシエーションは、ミドル・クラスの閉鎖的な若さという性格付けがなされることが多かったが、ここに挙げた諸事例に即せば、その判断は早計と言わざるを得ない。

(26) アメリカの社会改革者にして女性権利活動家ジェイン・アダムズによって1889年にシカゴで設立された「ハル・ハウス」(Hull-House)は、人々の出会いと社会奉仕活動のセンターとなり、シカゴを越えて広く知られ、またモデル的な意義をもった。

の重要なファクターであることは、訪れた者には明らかであった。多くの委員会において、女性たちは「コロンブス・ソサエティ」を結成して、女性パヴィリオンのための資金集めと展示の準備にはげんだ。ソサエティのなかには万国博覧会の後も永く存続したものもあった。女性たちは毎日のように女性パヴィリオンにおいて講演を行ない、また参加国のどの女性ソサエティも博覧会と連携して会見の場を設けた。合衆国の中でもこの時期に最も活動的で広がりを持っていた女性団体の一つ*「シカゴ女性クラブ」は、水曜日ごとに午後は自分たちの拠点としている建物を公開した。そこでは、他所からやってきた女性たちも参加して意見を交換することができた。かく万国博覧会は、多くの女性参加者に衝撃的なまでに影響をあたえた。代表的な例を挙げると、ノースカロライナ州の博覧会女性マネージャーは多大の刺激を得て帰郷し、以後25年にわたって女性ソサエティのネットワークを自分の故郷の町に構築した⁽²⁷⁾。

活動の多彩な広がり

同時期には*「女性クラブ総合聯盟」と*「全米有色婦人クラブ協会」が設立されただけでなく、州規模・郡域・都市域などさまざまな次元で集会が開かれてローカルなソサエティ設立の波が盛り上がった。「女性クラブ総合聯盟」に集まる団体だけでも、1890年代後半にはソサエティの数、メンバー数ともに二倍になった。それ以外の種類のソサエティも、愛国主義も含めて、同じくこの時期に形をとった⁽²⁸⁾。

(27) コロンブス記念博覧会、すなわち1893年の「シカゴ万国博覧会」の研究とそこでの女性の役割に関する資料は非常に多い。その価値づけ・観点・成果については3点の大部の書物を特筆する。Mary K. O. EAGLE (Ed.), *The Congress of Women*. Chicago 1984. 2 Vols.; May Wright SEWALL (Ed.), *The World's Congress of Representative Women*. Chicago 1984.; Jean WEIMANN, *The Fair Women*. Chicago [Chicago Academy] 1981. このうち、ジェイン・ウェイマンの著作は万国博覧会と女性活動との関聯の解明についてはやや薄弱であるが、有益な情報を含んでいる。; また次をも参照, Gayle GULLETT, *The Political Use of Public Space: The Woman's Movement and women's Participation at the Chicago Columbian Exposition*. 1985. (1987年の「女性史に関するパークシャー大会」における口頭発表)

(28) Mary I. WOOD, *History of the General Federation of Women's Clubs*. New York 1912.; Tullia Kay Brown HAMILTON, *The National Association of Colored Women*. (博士論文 Emory University 1979); Beverly JONES, *Mary Church Terrell and the "National Association of Colored Women"*. In: *Journal of Negro History*, 67 (1982), p. 248.

この進歩の時代に急増した女性オーガニゼーションには際立った特徴がみとめられる。自治体の枠を活かした活動への強い姿勢で、それは当初掲げていた目標の如何によって制約されなかった。地域の教育プラン、学校校舎の質の向上、学校給食、病院、図書館、シンフォニー・オーケストラ、牛乳と飲料水の質への自治体による基準設定、託児所と公共幼稚園、未成年者裁判所、駐車場、遊園地と公共浴場、これは長いリスト数ポイントにすぎないが、いずれについても特定の女性ソサエティがイニシアティブを發揮した。黒人女性のソサエティは、白人のソサエティに等しい意義が認められることに腐心し、特に黒人居住区での活動に力を注いだ⁽²⁹⁾。テキサス州*ガルヴェストンは19世紀を通じて最大級の自然災害に見舞われ、それに重なって起きた洪水によって町は浸水し6000人の死者が出たが、その後の復興を牽引したのは*「女性健康保護協会」であった⁽³⁰⁾。1914年、*「アメリカ自治体聯合」は、若い女性歴史家*メアリー・リッター＝ピアードに、自治体改革に女性ソサエティがどのように貢献したかを明らかにすることを委託した。300頁を超える大部なものとなった彼女の報告書は、夥しい種類の活動に関する詳細な記述で占められている⁽³¹⁾。

なおその間、幾つかの頂上組織は、アメリカの政治プログラムとの取り組みを進めていた。たとえば自然資源の保全は、各地で、女性ソサエティの主要な関心事の一つとなった。そこで1890年代に手掛けられた作業は、10年後に《自然保護運動》と呼ばれることになる動向を先取りするものだった。カリフォルニアの*レッドウッド（赤い森）、*キングズ・キャニオン国立公園、*メサ・ヴェルデ、*ハドソン川のパリセーズ崖、これらは女性ソサエティのお陰で、さまなければ間違いなく起きていた破壊から護られたのである。1906年の*《聯邦純正食品・医薬品法》の議会での可決にも「女性クラブ総合聯盟」の力が大きかった。同組織を指導する女性

(29) 合衆国レベルの頂上組織諸団体 (The American Clubwoman や The National Municipal Review)、に関する歴史研究については、非常に多くの資料が供されている他、このテーマに関わる多くの手書き文書が存在する。

(30) Elizabeth H. TURNER, *From Benevolent Ladies to Civic Women: Galveston's Female Voluntary Association 1880-1910*. (「南部史アソシエーション Southern Historical Association」の1986年の大会における口頭発表)

(31) Mary R. BEARD, *Women's Work in the Municipalities*. New York, D. Appleton 1915.

たちは、議会と行政に対して女性の視点を強く反映させることに時を追って力点を置くようになっていたのである。女性ソサエティ、これにはミッション団体や節制運動の女性オーガニゼーション、また青少年を対象にしたキリスト教会の女性団体、さらに多数の世俗的な団体も含まれるが、これらは、*《革新運動》が擁護に努めていた社会正義のプログラム作りに加わった。工場査察、児童労働の規制、最低賃金の法制化、労働時間の制限、児童を対象にした聯邦機関の創設、これらが推進されたのは、女性ソーシャルワーカーと政治の分野での女性改革者たちの聯繫によってであった。1912年の*進歩党の綱領の多くの項目は、その起源を女性オーガニゼーションあるいは女性ソサエティの中央組織に負っていた⁽³²⁾。

高等教育への女性の進出

政治における女性参加の高まりを後押しした大きな社会的変化の一つとして、高等教育への女性の進学が急速に進んだことが挙げられよう。各地で、女性たちによる自発的な諸団体が、女性のための高等教育機関（たとえば*《ペムブローク・カレッジ》や*「ガウチャー・カレッジ」）の建設に尽力し、また大学への女子の入学を働きかけた。1900年には、全米で約5000人の女性が《学士位（バチュラー・グレイド）》を得た。中にはさらに上の学位を得た者や、続けて学問分野で活動した者もいた。博士学位や弁護士資格を得た女性の数も増え、その中には女性ソサエティで指導的な立場に立った者もいた。そして指導部に大学卒業者が入ることによって、女性ソサエティの性格も徐々に変化した。オーガニゼーションには絶えず複雑さが増し、社会的目標や政治的目標を設定すること自体が新しい社会科学の成果であったが、それを組織的かつシステムティックに追うための知識と能力の準備も進展した⁽³³⁾。

(32) ジェイン・アダムズは、進歩党がセオドア・ルーズベルトを大統領に指名したことを支持したが、それを批判された時、彼女は、自分が生涯をかけて闘った課題を義務とする政党への支持を棄てるわけにはゆかない、と反論した。

(33) 自主的な組合諸団体における大学卒業女性たちの役割は研究されて然るべきであろう。たとえばガートルード・ウェイル (Getrude WEIL 1879-1971) は、スミス・カレッジ (Smith College) に通ったノースカロライナ州における最初の女性で、同校では、システムティックな学術研究の方法を学び、社会的正義をめぐる多くのディスカッションに活用した。彼女は、また家族から、社会的キャリアを歩むことを断念するように説得されたが、その後の人

女性参政権の達成

1910年頃から、参政権運動の中に、女性たちの組織的活動という新しいスタイルが登場した。女性参政権を目指すソサエティ諸団体は、州の次元でも連邦の次元でも協力し合った。彼女たちは、議会の選挙区ごとに組織化を進め、州議会の全てのメンバーと連邦議会の議員一人一人に関する詳細な文書を作成した。文書には、議員の友人や妻に関するデータ、また多くのアクチュアルなテーマへの議員本人の見解が記載された。こうしてデータのネットワークがつけられたことによって、上院と首都ワシントンの行政府、さらに各州都も、正確な情報を共有する女性たちに包囲されていった⁽³⁴⁾。そうしたオーガニゼーションの集中した構築と、増大する困難にもめげず取り組んだ作業の成果として、連邦各州は女性参政権の闘士たちの隊列の側に次第に傾いた。選挙が行われるごとに、新たに選出される代議員には女性参政権への賛成者が増えていった。闘いは1920年に決着した。各州の議会の賛成を得て、連邦憲法修正19条が批准されたのである。

5 評価

女性ソサエティが個々のメンバーに対してどんな意味を持っていたか。また一般社会にとってどんな機能を果たしたか、という問いについては、当然ながら唯一の正しい答えがあるわけではない。しかし、18世紀末、女性オーガニゼーションは一種の早期警戒システムとして始まったと言えるだろう。すなわち、社会的喫緊事を認識し、その解決を目指したのである。また当初は自力で、後には、該当する政府機関を動かすことによって

生をノースカロライナ州ゴールドズボロ (Goldsboro) で過ごし、やがて同州における有力な政治家となった。なお彼女が政治活動の上で関わった団体には、「ゴールドズボロ女性クラブ」(Goldsboro Women's Club)、「女性クラブ・ノースカロライナ聯合」(North Carolina Federation of Women's Clubs)、「ノースカロライナ男女同権クラブ」(the Political Equality Club of North Carolina)、また1920以後は「女性選挙権者同盟」(League of Women Voters)が挙げられる。これは次のアーカイブ資料による。Gertrude Weil Papers, North Carolina Department of Archives and History, Raleigh, N. C.

(34) 女性の選挙権が他に比べてポピュラーではない点で独特であった連邦州ですら、女性の組織能力と行政手腕がどれほど高い水準に至ったかを示すのは、リッチモンドのヴァージニア州立図書館の「ヴァージニア州選挙権団体」の文書類である。これと同様の情報価値の高い資料が、多くのアーカイブに存在する可能性は高い。数々の証言に照応する女性選挙権の歴史に関する重要な局面がなお解明される必要がある。

責任を引き受けようとした。これについて差し当たり、まったく別々の4つの事例を挙げてもよい。先ず1800年で言えば、都市の貧困は、既存のインフラストラクチャーの能力を超えていた。これに対して女性たちは慈善ソサエティを組織して、原因はともあれ自力で糊口を凌ぎ得ない人々への自治体の責任原理を実現することに着手した。やがて博愛として始まったものが、一世紀を超える期間を通じて、少しずつ州や聯邦の次元でのケア・プログラムのオーガニゼーションへ移行した。

二つ目として、1830年代には都会生活と工業生産が変化をきたしたことによって、飲酒が大きな社会問題となった。これに対して女性たちは、節制運動を起こした。当初は、個々人を引き戻す努力をしていたが、後には関係する法を整備する闘いとなった。19世紀後半の急激な人口増は、従来は家庭が面倒を見ていた諸分野に自治体規模の一聯の喫緊事が発生した。それへの対応として、女性ソサエティは、*《地域ハウスキーピング》のコンセプトを掲げて⁽³⁵⁾、住環境をより衛生的・より健康的にすることに向けて活動をはじめた。

むろん、これはこれで、社会的・政治的・経済的な意義多い結果につながった。女性たちは、なぜ貧困があるのか、それはどのように防ぐことができるのかという課題に絶えず自覚的に向き合った。不健康は屢々貧困の必然的帰結であった。ちなみに20世紀の初期に、合衆国の児童死亡率は他の多くの工業国家よりも高いことが明白となった。これに対して女性たちは児童関聯の公的機関の設置を議会にはたらきかけ、それは10年後に、母子の健康のケアに関する*シェパード・タウンナー法の公布として結実した。以後、児童死亡率は低下した。

三つ目として、この他にも今日から振り返ると、女性の提起に端を発した課題には、教育、健康、宿泊、衛生システム、賃金の不平等、地域政治の根本課題としての環境がある。軍備の縮小もそうで、論議の口火が切られたのは第一次世界大戦中であつた。国際的な通商も、第二次世界大戦の時期にテーマとして取り上げられた。

(35) 出発点は、女性が家事をこなす如く町村の運営がなされなければならないとの考え方であつた。すなわち、清潔な環境と腐敗の回避である。このコンセプトは、19世紀末に、ハル・ハウスに参加した女性たちによって発展を見た。

女性たちは、新たに浮上した喫緊事をも課題にし、同時に、新たなイデオロギーの諸要素を伸展させた。またその論議を、伝統的なテーマに着地させた。とりわけ母親の責任のテーマがそうであり、競争と物質的成功だけが物を言うのではない社会に力点を置いた。しかしアメリカを牽引するイデオロギーは非常に強力で、そこから逸れるすべてをも、いとも簡単に吸収することを示した。そうではあれ、*ジェーン・アダムズが簡潔にまとめたように、北米社会が基本的な信条としての社会ダーウィニズムから幾らか距離を置いてデモクラシーと社会倫理の方向へ舵を切ったのには、女性による諸々のオーガニゼーションがそれを強いたことが本質的であった。当初、女性たちは、〔訳者補記〕女であることは神の意志を実行していることとみなした。20世紀になると、女性たちは、《性決定として女》になっているとの議論を繰り広げた。この二例において、女性たちは、人間の一方の元素（として女性であること）と、（性決定に）^{おもんぼか}慮ることを公共の政治に組み込むことを試みた⁽³⁶⁾。ちなみに、組合リーダーである裕福な女性たちが、彼女たちが工業化によってこうむる人間の犠牲とみなしたものについて企業の責任を問うたのは驚くべきことで、また歴史分析にとっては刺激的な局面である。たとえば、*ベルタ・オノレ＝パルマー（1849-1918）がシカゴ万国博の開会にさいして女性に向けて行なった挨拶がある。なおベルタの夫はシカゴの代表的な工場経営者であった。

誇らしき19世紀、この発明の時代は、至るところ機械が導入され、工場製品は安価になることを結果しましたが、そこでの歩みは遅々たるものでした。大衆の境遇の問題性は、期待に反して少しも軽減されなかったのです。日々のパンを争うことは昔と変わらず厳しいままです。至るところ、同じ光景です。人々が密集する工場地帯、労働者大衆が群がって激しく競り合い、過重な労働を強いられた生きる力を失う多くの人々がおります。脅威的で力を萎えさせるような環境の中で生きるために人々は闘い、その闘い自体が無意味に見えるくらいです。封建制時代に較べても、これら数々の問題に対して一向に解決を近づいていないこと、

(36) ベルタ・パーマーの演説の引用は次による。Weimann J. WEIMANN, (前掲注27), p. 249. なお、これ以後の数行と引用文は、元の脚注を訳者の判断で本文に移した。

これは、近代の啓蒙的思念に突き付けられた重い問いかけなのです。

四つ目に、女性たちの博愛活動がもつ他の諸側面をもう少し検討してみなくてはならない。女性だけが社会的諸問題を認識したわけではないが、女性は、男性とは違った仕方でそれを解決しようとした。もとより、その努力は、どこでも同じように成功したのではなかった。昔も今も、女性たちは組織化へ進み、解決の青写真を描くか、あるいは少なくとも改善を提案し、またロビイストの技術を覚え、法案を通した。自治体の状況は改善され、社会政策のプログラムは合衆国レヴェルでヒューマンなものとなった。加えて女性たちは、もう一つのイデオロギーを提示した。

しかし、女性ソサエティが鍵になる問題に目配りしていたことも明らかであった。19世紀後半におけるアメリカ・インディアンの問題性などである。しかしその解決に着手するや、その努力は、好ましい成果ばかりではなく、却って傷を深くすることもあった。

さらに、アメリカ女性は、男性と同じく、アメリカ文明の一部であった。女性たちは、ある種の人間的欲求についてはアウトサイダーの立場でしかないことを思い知らされながらも、時代の避けては通れない局面に関わることになった。人種、階級、エスニック帰属性などで、それは「女性クラブ総合聯盟」(⇒p. 169) や「全米婦人参政権協会」(⇒p. 167) の記録から明らかである⁽³⁷⁾。ちなみに筆者の賢明な友人かつ助言者である*キャロライン・F・ウェア(1899-1990)は、長い人生を通じて当地だけでなくラテンアメリカの様々な組合に貢献した人だが、1987年2月1日付けの手紙で考えを伝えてきた。

この問題をあまり考えたことがない人にもすぐに分かることですが、男性たちは、この社会の決定的な諸機関に対して、どう見ても絶大な力をもっています。そして、アソシエーションを、一般的に言えば、いわば趣味的で、重大でない、奇妙な目的のためだけに利用しています。女性が自由意志でアソシエーションに参加して、その経験から自分たちの価

(37) これ以後の数行と引用文は、訳者の判断で本文に移した。

値観をつくりあげ、他方、支配的で力のある組織からは無視されたり締め出されたりすることに照らすなら、女性が自分たちのアソシエーションの活動範囲を広げていわば前線を形成することだってできるのではないのでしょうか。自分たちのアソシエーションを、社会変革を推し進める道具にするべきではありませんか。どうでしょう。

なお押さえておかねばならないことだが、女性ソサエティは社会的プレステージを得るために利用されることがある。愛国団体（オーガニゼーション）などは人種的・民族的な確執をいつそう悪化させることがある。さらにソサエティという拠りどころが、何であれイデオロギーのプロパガンダの格好の道具に使われることもある。今日のアメリカ合衆国には、進歩的なソサエティもあれば、反動的なソサエティもある。*「アメリカ・フレンツ奉仕団」(AFSC)⁽³⁸⁾がある一方、*「クー・クラックス・クラン」がある。*「全米女性同盟」(NOW)⁽³⁹⁾があれば、他方では*「(全米)生存権」(NRLC)⁽⁴⁰⁾もある。片や*「アメリカ・デモクラシー・アクション」(ADA)⁽⁴¹⁾、片や*「ジョン・バーチ・ソサエティ」⁽⁴²⁾ということにもなる。過去の社会的活動の全体像となれば、あらゆる種類のソサエティに目配りしなければならないだろう。

女性ソサエティの内部で、女性たちは、男性の場合と同様、ポジション争いを演じ、実権やプレステージを競い、同僚女性たちともめ事を起こし、時には十分な情報を得ないまま一時の勢いで分派をつくった。しかし全体としての印象を言えば、女性は男性に比べて簡単にくじけたりせず、同じ関心をもってソサエティに加わった男性よりもずっと粘り強く目的に向かって進んでいった。女性たちは、少なくとも19世紀には、仕事に取り組むや、自分の手を汚す覚悟も十分できていた。

(38) 「アメリカ・フレンツ奉仕団」(AFSC) は、社会正義と平和のためのクエーカー信徒の団体である。

(39) 「全米女性同盟」(NOW) は、フェミニズムを目的とした団体。

(40) 「(全米) 生存権」(NRLC) は、人工中絶の権利のために闘っている団体。

(41) 「アメリカ・デモクラシー・アクション」(ADA) は、個人の自由権と経済的・社会的公正のためのリベラルな独立組織。

(42) 「ジョン・バーチ・ソサエティ」はナショナリズムと右派保守主義の組織。

ソサエティでの活動は、女性のステイタスとそうした《女の》顔立ちにどのように作用しただろうか。最も分かりやすい変化は、ソサエティ活動を通じて、個としての女性にとってリーダーシップと自信が一気に高まったことである。個的な進展と社会的伸張が期待できる意義を強調した心理学者もいた⁽⁴³⁾。世の中が、また特に男性が、女性が公共の場でどれほど活発に対処できるかを初めて知るや、女性の能力とその成果への期待がふくらみ、一層の活動を願うまでになった。そうした交流の動きは、個々人にも劇的に影響し、女性に適した活動なるものの定義を押し広げた。《新しい女性》は決してスローガンだけではなかった。この概念は、意義大きい社会的推移を言い当てている。

アーサー・シュレジンジャー（シニア）は、女性ソサエティの活動を正しく表現していただろうか。女性の場合、集団行動へのトレンドが浸透するのが非常に緩慢であったのは、その通りである。しかし、新しいチャンスがあれば、取り掛かるのに躊躇はなかった。自信の高まりと、社会生活・経済生活における大きくなる一方の喫緊事が、そうしたオーガニゼーションの可能性を押し広げた。新しい実験は、どれも次のステップへの踏み台となった。そして遂に、すでに目配りしておいたように、アメリカには未踏の生活空間は残っていないまでになったのである。

[訳者解説]

本篇はアン・フィラー・スコット女史によるアメリカにおける女性を主体としたクラブ・組合に関する論説の翻訳で、書誌データは以下である。

Anne Firor Scott, *Amerikanische Frauenvereine im 19. Jahrhundert: Von der Wohltätigkeit zur Reform*. In: Rita Huber-Sperl (Hg.), *Organisiert und engagiert. Vereinskultur bürgerlicher Frauen im 19. Jahrhundert in Westeuropa und den USA*. Königstein / Taunus [Ulrike Heimer] 2002, S. 75–97.

本篇の元は、2000年11月17・18両日にドイツのハノーファー大学におい

(43) 期待と能力達成は相関関係にある。なお《期待》の機能価値を専門的に扱うものとして期待理論がある。

て、女性主体のクラブ・組合の意義を見直す歴史学者たちの国際フォーラムが開催されたときの発表で、2年後に、論文の体裁に整えられて大会報告集に収録された。なおその大会の企画と趣旨については、最近本誌上に、大会の責任者リタ・フーバー＝シュベール女史の論説を訳出し、そこに解説をほどこした（愛知大学国際問題研究所『国研紀要』158, 159号）。

次に論者についてである。アン・フィラー・スコット (Anne Firor Scott 1921-2019) は、米ジョージア州モンテズマ (Montezuma / Macon County) に生まれ、2019年に死去したアメリカ史家で、特に南部女性史を専門とした。はじめジョージア大学に学び、最優秀類 (summa cum laude) に特定された。NPO「全米女性有権者聯合」(League of Women Voters: LWV)のワシントンD.C.での勤務を経てノースウエスタン大学（イリノイ州シカゴ郊外）において政治学の修士号を得た。1947年にアンドリュー・スコット (Andrew MacKay Scott) と結婚し、スコット姓を名乗った。3児を育てつつラドクリフ・カレッジ（現在はハーヴァード大学の一部）で学び、1958年にPhDを得た。1960年にはフルブライト財団派遣教授となった夫と共にイタリアに滞在した。1961年にデューク大学（ノースカロライナ州ダーラム）の助教授となり、1980年に同大学で女性として最初の歴史学の教授に就き、1991年に定年となった。学会との関わりでは、1984年に「アメリカ史家協会」(Organization of American Historians: OAH)の会長、1989年に「南部歴史学アソシエーション」(Southern Historical Association)の会長となった。

著作は、南部女性史と合衆国女性史に関して約20点を数える。特に1970年に刊行された最初の著作『南部の女性たち：基底存在から政治の分野へ』は新しい分野を切り開いたとして高く評価され、今日では古典的な意義をもつ。日記や手紙を史料として用いつつ、女性は決して非政治的でなかったとして、データを呈示しつつ活写したのである。またジョージア州に絞った女性史の他、合衆国全体を射程においた女性の立場の歴史的変遷の把握においても独自の観点を示した。それにあたっては、著名な個々の女性の経歴ではなく、女性が団体、とりわけアソシエーション形式の集団を結成したことを重視した。歴史的に著名な女性についても、ニューヨークにおける慈善活動の先覚者イザベラ・グラハムや19世紀半ばから後半の女性参政権運動におけるエリザベス・キャディ・スタントンのように集

団を結成して社会活動を推進した存在に注目した。また女性の目から見た歴史の諸相として、エムマ・ル・コンテの日記の掘り起こし等も手掛けた。

なお言い添えれば、アソシエーションはクラブやソサエティの名称を掲げていることも多い。またそれをアメリカ社会の際立った特徴として評価した最初はアレクス・ド・トクヴィルで、『アメリカの民主政治』下巻(1840年)においてであった。事実、アソシエーションは近現代の一般的趨勢と言ってよく、政治や経済の団体からスポーツの団体、たとえば野球(MLB)・サッカー(NFL)・バスケットボール(NBA)・ホッケー(NHL)あるいはアメリカ映画協会(MPAA)まで、また多種多様なヴォランティア団体から趣味の集まりまで、多くの人々にとって生活の実際は何らかの団体との関わりなくしては考えられない。事実、そうした団体は日常の話題でもある。しかしアソシエーションとは何かという原理に関わる研究が意外に手薄であったことは、本篇の冒頭でもふれられている。またある種のアソシエーションについては歴史の実態の系統的説明はほとんど手つかずのまま放置されていた。女性が中心になってつくられた団体はその代表的なもので、その空白の解消に向けて基礎を築いたのがスコット女史であった。

そのため、2000年のドイツのハノーファー大学における女性主体のアソシエーションの歴史をテーマとして国際フォーラムにおいて、主催者が特に招待したのがスコット女史であった。女性によるアソシエーションの結成に関する研究は、英米では1970年代から、ドイツ語圏は少し遅れて1990年代からと言われるが、スコット女史は、その英米における際立った存在であった。なお歴史研究であるために、たとえば女性参政権が実現する経緯など、今日からみれば過去の埋没した脈絡の掘り起こしの印象が起き勝ちだが、スコット女史の場合は、今日につながる要素をそこに認めたことが注目される。具体的には、女性が牽引した集団は社会発展が必然的に併せもつ危機や歪みに対して《早期警戒システム》の役割を果たしたことを論じている。ハウスキーピングや食品衛生や環境汚染や自然保護など、いずれも女性主体のクラブ・組合がパブリック・オピニオンを先導した事例で、いずれの課題も、今日、さらに将来へ延びている。そうした世論形成における女性団体の役割は、今後も未知の領域を切り拓く可能性をもっている。なおスコット女史の著作のうち数点を以下に挙げる。

- The Southern Lady: From Pedestal to Politics 1830–1930*. 1970.
Women in American Life. 1970.
The American woman: who was she? (Eyewitness accounts of American history series). 1971.
One Half the People: The Fight for Woman Suffrage (with Andrew M. Scott). 1975.
What, then, is the American; this new woman? 1978.
Making the Invisible Woman Visible. 1984.
When the World Ended: The Diary of Emma LeConte (Earl Schenck Miers is the editor and Emma LeConte is the author). 1987.
Virginia Women: The First Two Hundred Years (with Suzanne Lebsock). 1988.
Natural Allies: Women's Associations in American History. 1992.
Unheard Voices: The First Historians of Southern Women. 1993.
Southern Women and Their Families in the 19th Century Papers and Diaries Microform (Research Collections in Women's Studies) (Anne Firor Scott, Daniel Lewis, and Martin Paul Schipper were editors; authors are University Publications of America and University of Texas at Austin Center for American History). 2000.
The Road to Seneca Falls: Elizabeth Cady Stanton and the First Woman's Rights Convention (author is Judith Wellman; Anne Firor Scott and Nancy Hewitt were editors) (Women in American History Series). 2005.

なお本篇については、拙論「西洋市民社会と集団形成—ドイツ女性史から見たクラブ・組合—」(愛知大学人社会学研究所『文學論叢』159輯)においても、周辺事情を含めて解説を加えた。また本篇は頁数に比して情報が盛りだくさんで、特に団体名など日本ではあまり知られていないものも多い。そのため簡単ながら訳注をほどこす必要があるが、紙数の都合からそれは次回にまとめることができれば考えている。

なお本篇は、上記の報告集に収録されたためにドイツ語で印刷された。元の英語の原稿をドイツ語に直した訳者として Paul Hoser の記載があるが、英語原文は不明であった。ともあれ印刷による発表はドイツ語であるため、表題も含めてドイツ語表記とした。

なお本篇の訳出にあたっては著作権を有するウルリーケ・ヘルマー社(2018年から所在地はドイツ、ヘッセン州ロスドルフ:Ulrike Helmer Verlag, Roßdorf/Hessen) から好意的な配慮を得たことを明記する。

S.K. Sep. 2022